

第62回全国リンゴ研究大会開催～前大会から4年ぶり～

第62回全国リンゴ研究大会宮城大会実行委員会及び全国果樹研究連合会は8月24・25日に新型コロナの影響で3年延期となっていた「第62回全国リンゴ研究大会宮城大会」を開催。県内外のリンゴ生産者約350人が参加した。初日は同県松島町のホテル松島大観荘で生産者の表彰や講師による講演と事例発表、二日目は現地視察を実施した。

### 会場の様子



記念講演では、仙台ターミナルビル株式会社の菊地秀喜<sup>ひでき</sup>専門監が、同社の観光農園で取り組んでいるリンゴのジョイントV字樹形による栽培技術について解説した。早期の成木化が見込め、定植5年目の収穫量は最大5ト/10畝で、基準より1.5ト多い。低樹高で管理や収穫等が効率よく行える。

菊地氏は「この栽培は枝の誘引資材と多くの苗木を必要とするため、初期投資が高む。国の助成事業も充実しているので、活

用も考えてほしい」と話した。

### 講演中の菊地氏



全国果樹研究連合会会長賞を受賞した亘理町の齋藤<sup>しょういち</sup>勝市さんは「近年は高い気温の影響で、着色不良などが課題だ。各地の参加者と情報を交換し、改善策を考えたい」と話し、事務局を担当する県園芸推進課の駒井真理子総括課長補佐は「りんごの作付面積が全国的に減少している。講演や発表事例が担い手に対して新しい経営の参考になればと思う」と話した。

### 全国果樹研究連合会会長賞を受賞した齋藤さん



【記事作成】宮城県農業会議